



# 妙たえ の光ひかり

通刊41号 復刊18号

1996年7月10日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡  
巻町角田浜 〒953  
TEL 0256-77-2025

## 睡蓮 (すいれん)

夏の池に浮かぶ睡蓮の花は、みるからに涼しげな風情が美しい。濁った水の中にあっても汚れることなく、純白やピンク、黄色といった清いままの花を咲かせるさまを、お釈迦さまが好まれた事で有名。

仏教という蓮華はこの華をいい、仏像の台座に刻まれるなど仏教のシンボルともいえる。ことに、怒り、争い、貧り、妬みといった人間の煩惱が満ちているこの世界(娑婆・しゃば)にあつて、この華のように汚れのない清い心を得ることを説かれたのが、妙法蓮華経というお経。これに、敬うという意味のナムをつけたのが、日蓮聖人の南無妙法蓮華経というのはご承知の通り。

写真の睡蓮は昨年住職の友人の横山さんが根を提供、檀家で巻町の内藤さんが土と枠を運び、胸まで水に浸って植え込み奉仕されたもので、今年見事な華を咲かせた。

『世間の法に染まらざること、蓮華の水に在るが如し』

(妙法蓮華経 従地涌出品 第十五)

# 「甘口辛口」

小川 英 爾

六月が出張続きの上に、夏から秋にかけて行事が立て込み、その計画と準備に忙しく、おまけに体調を崩して原稿がまにあわない。というわけで、今回は以前「新潟日報」に書いた文を転載して、ご了承をいただきたい。

「甘口辛口」は長く続いて評判もいいエッセイで、食に関係あればなんでもいいという気軽な内容。毎回新潟に縁のある人が、依頼されて十回ずつ書いている。ここに載せた文章は、二年前の平成六年四月に紙上掲載されたうちの五回分。

「新潟日報」を購読されている方は目にはしていると思うが、時間も経っているし、県外の方も多いので…。ジメジメした梅雨時にサラリとした文も如何かと。

## お斎のルール

法事など仏事の後のお斎（とき）の席で気を使うのが、酒をやめてご飯を食べるタイミング。しきたりとして、主客である住職がご飯を食べるまで他の客はだれも食わず、住職が食べ始めたのを機に、皆杯を置いてご飯をいただくことになっている。酒の席がダラダラ続いたのでは、裏方で働く女性たちが大変という昔の人の知恵か。

このタイミング、本来は施主が決める。途中で礼の言葉とともにお布施を差し出したときが合図で、これを受けて住職が、お酒も十分いただきましたからそろそろご飯を、となる。だから施主の方こそ気配りが大変なのが、近ごろこれが崩れているからこちらが気を使ってしまう。

一方、施主と合意の上で住職がもう少し酒を飲む時は、一応ご飯をいただいてお膳（ぜん）の上に置いておけばいい。ある時それで調子にのって飲み過ぎ、その家の九十近いばあちゃんに「おなご衆が困る」としかられた。若いころの話。

## 結婚記念日

寺の生活ははたが見るほど暇ではない。お経回りのほかに電話、来客の応対、手紙の返事に原稿書き。説教の用意、事務整理に掃除。人生相談もけっこう多く、年中無休の二十四時間勤務に近い。法事が日曜祭日に集中するから、必然的に家族との約束も後回しになる。

昨年十月が私たちの結婚十周年。何の予定も立てられずに、当日せめて外で食事をとった。それも急な来客ですっかり遅くなり、小学三年を頭に四人の娘たちは大むくれ。とにかく町に出て気心知れた檀家（だんか）の焼き肉屋に飛び込んだ。一人いた先客も檀家のIさん。

Iさんのお誘いにしばらく付き合った後、「実は今日は結婚記念日で」と切り出した。するとIさん、それはと後の私の酒代まで払って帰られた。子供たちとたらふく食べて、さて支払いはと言うと、店主曰（いわ）く「結婚十周年なら今日はおれにおごらせてくれ」と勘定を言わない。妻と二人、胸にジーンとくるものがあった。

## 川蟹逃走事件

川蟹（かわがに）は花見時が一番うまいと聞いたことがある。海に近いので海の蟹はその気になればいつでも口に入るが、川蟹はそうはいかない。

数年前の今ごろ、ある夜の檀家（だんか）の集まりで、おれが捕ったという人からビニールの肥料袋に入った二十匹近い川蟹をもらった。寺に戻り、ゆでるのは明日ということで台所の流しに置いた。そこで呼吸できるようにと袋の口を開いたままにしたのがいけなかった。翌朝気がつくとき袋の中にいるのは二、三匹だけ。あとはと見回すとテーブルの下に一匹、台所の隅に一匹。本格的に探して冷蔵庫の裏、本堂への廊下、裏の神社の境内など、十数匹を見つけ出し、早々にゆで上げた。

後日くれた人に話したら、ふたがないと深いバケツの中からでも下から順次重なって、ふちに上りついたやつらから逃げていく。一匹残らず逃げられたこともあったが、最後のやつは引き上げてもらったのか、いまだに不

思議だと。本当かなと思いつつその様子を想像した次第。

## インドの野菜

インドを一人旅した折の、友人のペンフレンドであるインド人宅を訪ねたときの話。

前夜遅く着いた私を気遣い、昼近くなった朝食のテーブルに、私と四十歳のご主人、その父親の三人が着いた。奥さんとメイドが台所に。「インド料理は辛い。これは口に合うか」と出されたのが、揚げギョウザのようであり。オーケーと答えて二つ目を口に運ぶ。

ニココリ笑ってこれはどうかと二品目が出た。先ほどより少し辛いがいける。これもオーケー、グッドと答える。ニコニコしてさらに三品目が出た。この調子で一品ごとに辛くなって、肉、野菜の料理が十種類並んでしまった。「これが食べればインド人と同じ」と最後に出てきたのが、生の日本でいう緑色のトウガラシ。右手に持ってライスと交互にかじる。確かにひどく辛いが不思議にうまい。これですっかり気心が通じてしまった。徐々に辛くしていく心遣いがうれしかったのと、日本で失われた野菜本来のにおいとまみが忘れられない。

## 素直な気持ち

角田浜に生まれ育ち、途中で七年間の東京遊学生生活を除いて三十五年間この地で暮らしてきた。この間の環境の変化といえは、道路が整備されて観光地としての様相が濃くなり、人工構造物が増えたことぐらいか。

相変わらず海では絶対量こそ少ないがさまざまな漁人類が捕れ、畑では大根、スイカといった砂丘地作物が、山では減少したが山菜を季節ごとに味わうことができる。幼い四人の娘たちも、これらの品にはスーパーで求めた物と確実にハシの動きが違う。こうした品々を前にしたとき、この地で暮らす幸せを実感する。

確かに車や通信手段の普及、生活エネルギーの変化は日常生活に利便性をもたらした。しかしその存在を知らなければなくても済んだのではないかと近ごろ思う。不便だったころもなつかしい気がする。

この先、便利な物ももういい。それより新鮮で自然で安全であってほしい。その意味で、環境も人の心までも変える原発は望まない。ごく素直な気持ちとして。

## 信心

# 「ごはん様」当番で感激

巻町松山 二輪勝彦(42才)さん

四月二十八日の「ごはん様」は、妙光寺の年中行事として、古くから日蓮宗信者の間では県内外に知られてきた。これは五カ浜の遠藤家に伝わる日蓮聖人が遺された「ご判(印鑑)」を、この日に限り妙光寺でご開帳するもの。

勝彦さんは八年前に父を亡くし、以来地区毎に三年に一度のこの「ごはん様」当番が、今年で三度目。「前二回



は若かったせいか余裕がなく、印象も残らなかったが、今年はそのすごく感激した」と語る。

今回の役割は遠藤家への「ごはん様」お迎え係。当日朝遠藤家へ上がり、お付のお上人様のお経、お加持、お話を受け、車で妙光寺へ出発。多くの信者が待つ岩屋前で御輿に移し替え、一キロ弱をお練りで向かう。山門では僧侶、稚児、雅楽の入ったお迎えの行列が待ち、ここで奉迎法要となる。

「このときなんだか胸にこみ上げてくるものがあった。今までこの行事は檀家だけのものだと思っていた。ところがたくさんの信者が県外からも集まり、この人達と檀家の当番の人もお参りの人も、皆一体になっている。それが七百年前の日蓮聖人との約束のご判をお祀りするため、しかも何百年も途切れずに続いている。ここに感動した

んだと思う。日曜のせいか人出も多く、桜も咲いて庭もきれいになって、雰囲気も良かった。」

勝彦さんは幼い頃、ここで稚児も経験している。二人娘で今小学生の麻乃ちゃん、珠代ちゃんもなった。嫁いだ勝彦さんの姉もその子供も。

元々母親の百合さんが信仰心厚く、この秋の身延山参拝旅行には、宗派が違いが実家の弟妹夫婦を誘って七人で参加する。なかでも長野県に住む妹夫婦は、百合さんの勧めで安徳廟を求めた。

勝彦さんは近くの自動車修理工場で、整備士を中心として働いている。妻の美智子さんとは村の青年団で知り合い恋愛結婚。新婚旅行先の沖縄で一緒だった、静岡と兵庫のカップルと十数年来家族同士の交流が続いている。二人で「人との出会いを大事にしたい」と語る明るい夫婦である。

三年前に静岡を訪ねる家族旅行の途中、身延山にも参拝した。その静岡の家族も偶然代々の日蓮宗の家庭で、しばしその話題が続いたという。

若い人達が自然に寺になじんでいく姿には、爽やかさが感じられる。

## 護持会報告

平成八年度の護持会費をお願いしています。妙光寺では毎年三月に通常の檀家役員会議を開き、皆さんにご協力いただいている会費の収支決算、その他について協議しています。会議は住職、檀家総代三名、世話人十七名の構成で、ごく重要な場合は、干与人の寺泊町法福寺のご住職が同席する規則です。

今年度の会議内容は全檀家に配布した「妙光寺護持会々報」のとおりです。重複しますが一部ここでもご報告して、ご理解をお願いします。

会費は例年通り檀家一万円、現在墓地だけの方五千円、安穩会費三千五百円です。お盆までに納入下さい。

## 墓地管理

墓地管理費が急増しています。暑い時期に墓地の草取りをする労力を集めにくい状況で、経費がかかってしまいます。仕方なしに除草剤を多用しますが、これも経費がかさむうえに土がポロポロになって、雨で土が流れる事態が生じています。今年度は、①効率的に除草剤を使用して墓地管理をする業者と年間契約、②クローバーを蒔いて雑草を防ぐ、という二つの方法を試験的に実施しています。

いずれにせよ山側に残る墓地の管理が限界です。お参りする人のない墓の整理を進め、残る方の分は各自

で管理していただく方針でまいります。

## 本堂建て替え事業

実施可否か賛否両論ありますが現状では未定です。客殿を設計された茶谷正洋氏（東京工業大学名誉教授、現法政大学教授）に、現在基本設計を依頼しており、これをもとに内容、費用の面から協議していきます。

百年二百年の計で考えねばなりません、軽々な判断ができません。今暫く時間を下さい。

## 松枯れ対策

前にお伝えしたように墓地を中心に松枯れ被害がひどく、危険性もあり大半を伐採しました。その跡に景観上、雑草の生えを防ぐため、木を植える必要があります。この合計費用が二百万円かかりますが、出所がありません。

次の項目と合わせて銀行借入れにし、本堂建て替え事業との関連のなか

で、皆さんの負担が大きくなるならいよう進めていきます。

### 立教開宗七百五十年

日蓮聖人が日蓮宗を開かれたのが一五二二年四月二十八日、房州清澄山でした。これを立教開宗といいます。

来る二〇〇二年がその七百五十年目に当り、宗門は各種の記念事業を計画、負担金が各寺に割り当てられました。妙光寺は七年間分納で合計二百七十万円にもなります。こちらも前述のように借り入れて対応します。

ちなみに妙光寺は一三二三年の開創です。二〇一三年に創立七百年を迎えます。

### 「岩屋」周辺の環境変化

日蓮聖人ゆかりの地で、七面大明神をお祀りする岩屋ですが、土地の全てが民有地で妙光寺の所有地は一切ありません。近年その所有の大半が地元の人の手を離れ、開発と称する景観破壊

を心配していました。

このたび新潟市の不動産業者から、岩屋前を別荘地として造成するので一部でも購入してはとの話がありました。協議の上、借り入れしている妙光寺の現状ではその余裕はなく、お断り



整地された岩屋前

しました。聖地である岩屋周辺の景観破壊に手が打てないのは誠に残念です。

### 『安穩廟』報告

安穩廟の申し込みが二百件を超え、二基目も残り僅かになりました。希望者はまだ増えると判断して、三基目の建設を決めました。工事は来春になりますが、予約申し込みを受けます。

三基目の建設に当り、全体計画を絵図面にしました。(九ページ)

現在基金が七千五百万円ですが、超低金利の昨今実入りはわずかです。そこで今年から国債、円建て外国債、日本生命委託にして、平均四％(非課税)の運用を予定しています。基金という基本財産ですので、安易な取り崩しは絶対せず、運用益の有効活用をする基本方針ですのでご理解ください。

## 身延山団参 若干名追加募集（バス三台に）

身延山久遠寺、七面山、鎌倉への団体参拝旅行（十月十四日～十七日）を計画、前号でご案内しました。

予定ではバス一台四十二人のところ、すぐに五十人を超過してしまいました。お断りするものも気の毒で、集まるか少々不安でしたが、バス二台八十人に増やしました。これを心配した方々のご協力で参加者も増え、そこへ新規の申し込みも続いて、九十五人になってしまいました。

幸いバスも新車が入るので対応できるとのこと、この際三台にしてゆったり行くことにしました。このためもう十五人程余裕があります。ご希望の方はお申し出ください。

ご案内では二階建デラックスバスでしたが、一台しかないためその下のクラスの、中二階建トイレ付デラックス型にしました。その分一台はドイツ製、二台は国産の新車とのこと、ご了承下さい。また三台になったことで送迎が細かくできます。七面山に登る方が六十人程です。登らない方は身延山の奥の院参拝（ロープウェー）、特別法要、昌福寺、上沢寺、本遠寺参拝、紅葉の昇仙峡散策、角瀬の俵屋旅館泊。翌日の合流まで七面登山口周辺参拝の予定です。

## 八月一日盆参のご案内

例年通り、八月一日がお盆の墓参り、施餓鬼法要です。

お墓でのお経は朝五時半から受付、十時には一、二人を残してお上人が法要のため引き上げてしまいます。この時間内におでかけください。

十時半に安穩廟法要、十一時施餓鬼法要です。ことに新盆の精霊は特別にご回向します。関係の方はお参り下さい。

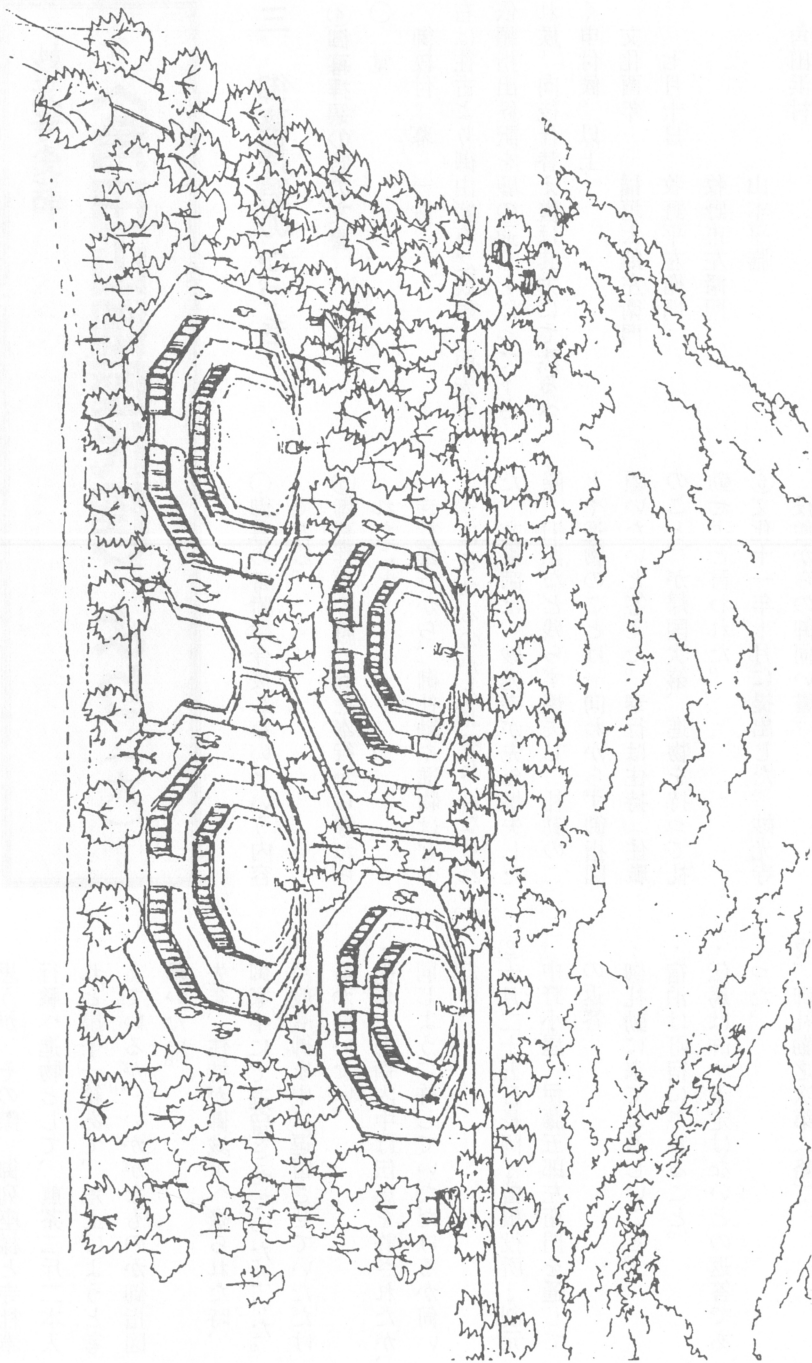
施餓鬼法要の塔婆供養は、各地区世話人か、遠方の方は同封のがきで、二十八日くらいまでにお申し込み下さい。一本二千円です。

墓参りの際に、ビン、ガラス、缶の類は墓に放置せず、必ず持ち帰って下さい。あとで割れたりして危険なうえ、枯れた花を始末するときとても困っています。ぜひご協力願います。



安穩廟 全体計画

設計 野沢 清



# 角田山御歴代控より(六)

## 三. 御幕拝領のつづき

### ④御幕拝領の時の文書

○ 覚

御紋付 幕 一対

右は往古より御由緒有之候趣ニ而先年  
依頼指出候訳を願の通りを以つて下さ  
れ候。向後仕替え儀は其方にて然るべ  
く申付候。以上

文化酉年 稲垣太郎左衛門

七月十日 牧野平左衛門

牧野市左衛門

山本平膳

角田浜村

妙光寺

○御幕の寄附は今後しないという内容  
である。

⑤御幕拝領の時、寺社奉行から尋ねら  
れたこと。

寺社奉行から、御礼勤や進物はどの  
ようにされるのかと尋ねになられ  
た。文海師は、妙光寺が先年焼失した  
際、旧記など残らず焼失し、礼勤のこ  
とや進物のことは一向わからず御指図  
願いたいと答えた。奉行は住持(住職  
のこと)が帰国次第、進物を持って礼  
勤せよと言われた。

⑥文化十一年十月に提出した、妙光寺  
役僧からの御伺い書。

・住持帰国次第、御礼勤に上りたいと

思うが、その際、御列座様と寺社奉  
行職へ進物として、煎茶二斤二本入  
れと扇子一箱あて、差上げようと考  
えているが、いかがなものか御指図  
願いたい。

・先年、住持が御城下へ登られた時、  
御家中にて逗留させていただいた。  
今般も御家中に逗留させていただけ  
るか伺いたい。

・先年、御領内中は伝馬を許されたが、  
同じように許していただけるか伺い  
たい。

②十月二十五日長岡↓曾根役所↓割元  
中野小屋 伊藤五郎左衛門を通じて  
の返答

・御礼勤に来てよろしいこと。  
・宿泊は町宿にされること。  
・伝馬は許す予定はないとの返答であ  
った。

ウ. 御礼勤之次第(略)

○この時以後、御幕を新しくしたとい

う記録はない。それにしても長岡藩の妙光寺に対する処遇は何故変わったのだろうか。

・妙光寺から御幕拝領をお願いしているながら、拝領の時、住職が自ら行かず、役僧を名代として行かせた。その非礼によるものか。

・役僧文海が住持にかわって拝領に行った際、家老や寺社奉行に献上品を持参しなかったためか。

・住持が御礼に長岡へ登ったのが御幕拝領後一年七ヶ月であることを考えると、いかにも遅過ぎたような感じもするが。

・此の時期は、山門建立の時にあたる文化十年二月より材木買入翌十一年九月建つ。屋根は十二年六月済む。日妙上人は京にあり、留守を預かる文海師も多忙を極め長岡藩に対する細やかな配慮が足りなかったのかも知れない。

・長岡藩の財政的な困窮も大きな理由だったと考えられる。

・文化十年は九代藩主忠精公の治世である。忠精公は松平定信の推挙で若くして幕府の要職につかれたという。二十八歳で寺社奉行、三十三歳で大阪城代、三十九歳で京都所司代と順調に昇進し、四十二歳で老中となり十六年間勤められた。また悠久

山の蒼紫神社の建立、鎧潟、田潟、大潟の新田開発にもつとめたという。

・藩主が老中として幕政に参画することは多額の金銀を必要としたという。

天明の洪水手当金として、忠精公は幕府から五千両拝借、大阪城代、京都所司代就任の時、それぞれ一万両拝借したという。

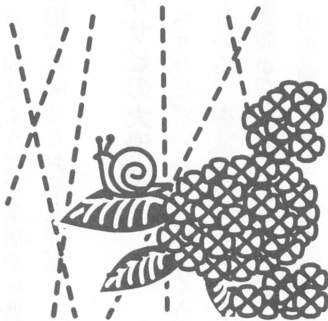
(ふるさと長岡のあゆみより)

長岡藩の留守を守っている家老寺社奉行等は、財政引き締め懸命であったであろうと推測される。

妙光寺への御幕拝領の中止も当然のことであったと考えられる。

(次号は長岡藩との関係のまとめ)

石田誠太郎



## 闇に消えたムササビの行方を追う②

新潟西高校教諭 藤田久

境内のねぐらから出巢したムササビは一、二回の滑空で、あれよあれよと言う間に周辺に移動し姿を消してしまふ。夕方、出没して鳥のように遠くへ行くから“バンドリ（晩鳥）”とはよく言ったものである。滑空の行先を、ずうっと目で追っていくのは闇夜に馴れていないと容易ではない。ムササビは広い境内を越えてどこで何をしているのだろうか。

### 移動の行き先

妙光寺に通うようになって五年目を迎えた。初めは、境内とその付近くら

いが範囲だろうと考えていた。それは周辺の海岸マツ林は深いから遠くまではいかない、あるいはマツの針葉など食べることはないだろうと高をくくっていたからなのだ。しかし追うにつれ、移動の一つが山門付近から、池の横に立つマツを経由して墓地の斜面に達した。さらに題目堂付近まで追うことができ、境内からはかなり離れて、守備範囲が予想を越えたものになっている。

一方、ヤギ小屋付近に行つて見失つたムササビは熊野神社参道に出没していることがわかり、さらに道路を越え

てとうとう松林に入ってしまった。林内はヤブで追えず、今もお手上げの状態である。同じように本堂横から裏山に行く場合も同じくお手上げだ。

### ムササビの大滑空

出るムササビがいれば入ってくるムササビもいる。本堂前の大イチョウや神社参道側から境内に入ってくる。時には、何の前触れもなく本堂上空を堂々と滑空してくる。裏山の上から飛来するようで、これには観察者の方が圧倒されるほどである。

このような滑空は他でも見ることがある。題目堂手前の斜面には、マツが二本そびえ立っていたのだが、前号で掲載されたようにマツ枯れのため伐採されてしまった。実は、ここで「墓地」を越え海岸松林に達する大滑空を目のあたりにすることが何度かあった。水平距離になると百メートルは楽に越え

るはずである。この距離感では墓地の外れに立って崖側と松林との間隔をながめていただければ納得いただけるだろう。高度も相当なものである。このマツを“崖松”と呼んでいた。

## 大切な立体空間

海岸マツ林から先の方はなかなか目にすることはないが、林間の小川の上を滑空し、道路にそって林縁伝いに神社の入口までやってくるのが幾度かあった。このことから連続の記録ではないにしろ、崖松から墓地越えをした行方は、滑空を繰り返してマツ林を通過し境内に戻ってくるという一周した帰巢コースが浮かび上がってきた。これこそが長期間、試行錯誤を繰り返して、広いエリアを探し求めていたムササビの行動圏について一つの発見ともいえる成果なのである。

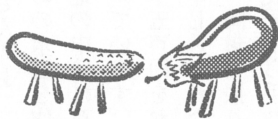
予想以上の移動と広がりになったわ



写真・水平滑空中のムササビ  
撮影 鎌田義明

けを考えてみよう。もうおわかりだろうが、ムササビは境内や墓地のような立体空間が広がる環境を好み、マツなどの高木や山の高度差をうまく利用して滑空しているからに他ならない。大滑空の日本記録というものがある。山梨県都留市で約一六〇メートルという測量結果が得られた。これも山の急斜面からの発進であった。つまり立体空間をともなった標高差と着木に使う高く太めの樹があれば大記録が生まれや

すいのである。しかし、いつも行なうわけではないが、ムササビの雄には遠くまで出かけ餌や縄張りを広げておきたいという衝動がどうもあるようだ。それにしても墓地前の斜面にそびえているマツの伐採は、枯れて倒壊の危険にさらされ止むを得ないものとはいえ、日本記録に続く大滑空を期待していただけない、ムササビばかりではなく我々にも惜しまれ残念でならない。ようやく得られた行動圏の記録も崖松なしでは語れず、しばらくは幻のままである。



## フェスティバル、会費のご案内

「第七回フェスティバル安穩」を八月二十四、五日に行ないます。これは埋葬者への合同祭祀と、会員、檀家、地域の人達、安穩廟に関心を寄せる人達との交流、そして安穩廟と妙光寺の宗教世界への理解を広めることを目的にしています。

今年のご案内のように、新藤兼人氏をお迎えします。大変ご多忙の中、妙光寺のあり方と安穩廟の趣旨に関心を寄せてくださり、お引き受けいただきました。講演だけでなく、参加者との語り合いの場も予定しています。しかし全員の発言は難しいので、予め決めた幾人かにさせていただきます。ぜひ新藤監督とお話したいという方、ご連絡下さい。五人前後を想定してお

り、超過の場合はこちらで調整します。二日目に、昨年お願いしたアンケートの結果をご報告し、これをもとに安穩廟について皆さんで語り合います。

今年のご要望で会場に椅子を一部用意します。足腰の弱い方も安心です。また夕食は地ワインと料理と葡萄酒の風景が評判の、レストラン「カーブドツチ」で、宿泊は岩室温泉の保養所それぞれ貸切にします。早めお申し込みの上、楽しみにおでかけ下さい。

安穩廟二基目も満杯に近い状態になりました。来夏完成予定で三基目を作ります。予約受付を開始し、金額はこれまでと同額の八十五万円です。九ページに計画図を載せましたが、将来的に植栽と水場、あずま屋の設置を予定

また本多さん、遠藤さんのお二人が、域内に虫を増やすための水辺を作ろうと準備中。さらに用地の申請に石田さんが奔走してくださっています。

今年度分の会費三千五百円をお願いします。檀家扱いを申し込まれた方は一万円お願いします。同封の振り替え用紙で、お近くの郵便局から手数料なしで送金できます。

フェスティバル安穩の法要の際、安穩廟の周囲で灯す大ローソクの献灯にご協力いただければ幸いです。一本五千円。一本毎にお名前を入れて灯しますが、その旨通信欄にご記入下さい。お盆法要は八月一日午前十時半から安穩廟前で。個々にお経をご希望の方は、朝から随時受付しています。詳しくは八、十六ページをご覧ください。新しくステンレス製の花立二十個を、会員の佐藤さんがご主人の一周忌の記念にご寄付下さいました。お盆から出しますので皆さんお使い下さい。

## 寺庭から

# ばーぼーのこと



「いよつ、とーぼー（父坊）、おはよう！」

四人の娘のうち、父親に向かつてこんな口をさくのはひょうきんな三女の綾だけだ。朝の気だるい布団のなかで、これをやられるとたちまち目が覚める。家族の名前を次々にあだなで呼んでいく。

「じゃあ、おばあちゃんは何？」

「ええーつと、ばーぼーだ。」

病院と家を行ったり来たりしていた義母が寝たきりになり、寺に戻ってきた。痴呆と歩行困難、おむつ使用、おさまりの老人介護の日々が始まった。

私は子どもの教育と老人介護という、大きな問題の二つを身をもって体験することになった。あまりにも生々

しい問題すぎて、自分自身も混乱してどうこう言うことも出来ずにいるのだが、逃げ場の無い大変な、でも避けて通れない現実がそこにある。

介護保険に関する討論を聞くと、どこか大切なことが置き去りにされているようで、むなししい。生まれてから死を迎えるその日までの営みを、連続した時間として考える真剣さが欠けていると思う。人の持つ命に対する優しさ、今の社会では無視されていると思う。あまりにも暗すぎるのだ。私は自分の老後を考えたととき、こんな扱いは我慢ならない。もつと夢と希望でいっぱいなの老後があってもいいはずだ。私たちは社会に対して今のうちに、威厳をもって怒りくるって、抗議するべき

と思う。

ばーぼーは、わが家の神様である。生活がばーぼーを中心にまわっている。こんなに家族をふりまわすことで、自分の存在と命の尊厳をこれでもかと見せつけてくれる。

私は実はこの義母と、消えることのない確執を抱えている。気にいられない嫁としての経験が、私の介護をいっそうつらいものになっている。でも義母は、血を分けた自分の四人の孫には、生きることの底力と支え合う必要性をしっかりと教えてくれているのかも知れない。かろうじて、私は娘たちが、介護の現実を見つめながら育っていくことに希望を見つけようとしている。

子供たちよ！ どうか住みよい社会を造っておくれ。これが、厳しい介護の日々から見える、明るい夢なのだと思うっている。サンキュー、ばーぼー！

小川なぎさ

# 行事案内

七月十日～十五日

東京方面お盆経

住職が新盆のお宅、法事の約束のお宅を中心にお伺いします。回りきれないため半分のお宅は秋のお彼岸に。

八月一日(木)

お盆墓参り、施餓鬼法要

午前五時半 墓お経受付開始

〃 十時半 安穩廟法要

〃 十一時 施餓鬼法要

昼 十二時 お斎

午後一時 説教

(本誌八ページをお読み下さい)

八月十三日～十六日

お盆棚経

例年通り住職と鎌田、それにお手伝いのお上人が手分けして全檀家に伺い

ます。何日か知りたい方は、十日過ぎにお問い合わせ下さい。新潟地区は早めになるかと思えます。その場合は直接ご連絡します。

八月十九日(月)

岩屋七面宮祭祀

午前十時半 本堂で法要、お加持

岩屋へ移動、法要

昼十二時 参詣者に赤飯供養

午後一時 説教

八月二十四、二十五日(土、日)

第七回フェスティバル安穩

安穩廟の供養祭。詳細はパンフで。

九月朔日未定

東京方面お彼岸経

住職がお盆に伺えなかつたお宅に。

九月二十三日(祭日)

秋のお彼岸中日法要

十月五日(土)

お会式、先代住職二十三回忌法要

あ・と・き  
が・が・き



初めに言い訳しましたように、主張やら行事の準備やらで疲労が重なり、体調を崩してしまいました。病院、友人のマッサージ師にかかりましたが、内科疾患はなく十日余りで回復、遅ればせながら本号を出すことができました。今は家族全員元気です。

この先のスケジュールを見ると十月までいっぱい、頭がクラクラしてきます。気分転換しながら適当にやろうと思えますので、すみませんがご理解下さい。

梅雨があけると暑い夏、お盆が来ればすぐに秋です。お互いに元気で過ごしましょう。(小川記)